



重箱

引間 隆文

いろいろな事があった令和3年も、早いもので残すところあと1月を切りました。年々歳々、時間の進み方が早くなっているように感じるのは、充実しているからでしょうか？それとも…。



それはさておき、今回の「今月の一品」は、正月準備にふさわしく重箱をご紹介します。

この重箱は、大字中藤下郷の旧家に伝えられてきたものです。外箱に「定紋附内朱外黒 本八寸重箱」と記されている通り、外は黒漆、内側は朱漆が塗られ、縁は金色に彩られています。外見は質素でありながら、蓋を開くと一転して華やぐ趣向は、人々に驚きを与えるとともに、食べ物をより美しく引き立てたことでしょう。

詳しい来歴は不明ですが、外箱の状態などから江戸時代後期から明治時代初期

に作られたものと推測されます。

重箱とは、食物を入れる蓋つきの容器のことで、木製や陶磁器製が一般的です。木製の場合は、漆塗りで2~5重にして使うことが多いのですが、重ねずに使うこともあります。室町時代から使われ始めたようですが、広く普及したのは江戸時代になってからです。庶民も花見や紅葉狩り、芝居見物などの飲食を伴う行楽を楽しむようになったためとされています。

12月の「一品」としてご紹介しているように、近年では、重箱と言えば正月のおせち料理のイメージが濃厚ですが、かつては季節に関わらず、行楽や冠婚葬祭などでの食事や食品を贈る際の入れ物として、重箱がしばしば用いられました。私が子どもの頃も、運動会で重箱を囲んで家族が楽しく昼食をしている光景を見かけましたし、お彼岸には祖母が、ずっしりと重いぼた餅を重箱いっぱいにつけてくれたことを思い出します。

重箱には、懐かしい思い出も詰められているのかもしれませんが。

「今月の一品」では、来年も多種多彩な「一品」を「重箱の隅を突く」ように深掘りしてご紹介していきますので、どうぞお楽しみに。

【参考文献】

山崎裕子「重箱」 福田アジオほか編『日本民俗大辞典 上』 吉川弘文館 1999年